

令和2年度第1回仙台市自殺対策連絡協議会 議事録

1. 開催日時：令和2年12月2日（水）19:00～

2. 開催場所：仙台市役所本庁舎2階第1委員会室

3. 出席者

[出席委員（五十音順・敬称略）]

相澤 隆之	（宮城産業保健総合支援センター）
小野 彩香	（特定非営利活動法人 Switch）
佐藤 圭司	（一般社団法人パーソナルサポートセンター）
佐藤 博俊	（仙台市立病院精神科）
菅原 由美	（東北大学大学院医学系研究科）
鈴木 琴似	（みやぎの萩ネットワーク）
清治 邦章	（仙台市医師会）
反町 吉秀	（いのち支える自殺対策推進センター）
武田 栄治	（宮城労働局）
田中 幸子	（藍の会、全国自死遺族連絡会）
千葉 栄子	（仙台市立鶴が丘中学校）
永井 恵	（仙台いのちの電話）
野口 和人	（東北大学大学院教育学研究科）
原 敬造	（宮城県精神神経科診療所協会）
藤岡 奈美子	（日本産業カウンセラー協会東北支部）
藤澤 能子	（宮城県行政書士会）
森田 みさ	（宮城県司法書士会）
渡部 裕一	（宮城県精神保健福祉士協会）

（欠席委員＝大久保 さやか（仙台弁護士会））

[事務局]

仙台市健康福祉局

4. 次第

（1）開会

（2）議事

① 重点対象に対する取組みの評価への意見・提案について

② その他

（3）閉会

5. 会議内容

(1) 開会

(事務局)

定刻となりましたので、ただいまより令和2年度第1回仙台市自殺対策連絡協議会を開催いたします。開会にあたりまして、健康福祉局障害福祉部長 高橋 よりご挨拶申し上げます。

(事務局：高橋障害福祉部長)

本日は、大変お忙しい中、自殺対策連絡協議会にご出席くださいまして、大変ありがとうございます。また、今回の協議会は、委員改選後にはじめて開催される会議でございます。委員の皆さまに置かれましては、ご多忙のところ、快くお引き受けいただきまして、大変ありがとうございます。

さて、昨年3月に策定いたしました仙台市自殺対策計画では、PDCAサイクルにより、毎年度、本市の取組みの評価・検証を行いまして、必要な改善を図ることといたしております。現在、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続いておりますけれども、その影響についても、注視をしながら、引き続き取り組みを推進していく必要がございます。

今年度は計画期間の2年度目に当たりまして、初めて計画に基づく、本市の取組みの評価・検証を行うこととしております。委員の皆様におかれましては、本市の一層の自殺対策の強化、計画の基本理念の実現に向けまして、ご自身の経験や知見を踏まえられた忌憚のないご意見をいただければというふうに考えてございます。簡単ではございますが、開会に当たりましての私のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

(事務局)

本日の協議会は、委員改選後、初めての会議でございます。委員の皆様には、令和4年8月31日までの任期でお引き受けいただいております。よろしく願い申し上げます。

委員の皆様を五十音順にご紹介させていただきます。お名前を呼びいたしますので、その場にて会釈をお願いいたします。

相澤 隆之 (あいざわ たかゆき) 委員でございます。

小野 彩香 (おの あやか) 委員でございます。

佐藤 圭司 (さとう けいし) 委員でございます。

佐藤 博俊 (さとう ひろとし) 委員でございます。

菅原 由美 (すがわら ゆみ) 委員でございます。

鈴木 琴似 (すずき こと) 委員でございます。

清治 邦章 (せいじ くにあき) 委員でございます。

反町 吉秀 (そりまち よしひで) 委員でございます。

武田 栄治 (たけだ えいじ) 委員でございます。

田中 幸子 (たなか さちこ) 委員でございます。

千葉 栄子 (ちば えいこ) 委員でございます。

永井 恵 (ながい めぐみ) 委員でございます。

野口 和人 (のぐち かずひと) 委員でございます。

原 敬造 (はら けいぞう) 委員でございます。

藤岡 奈美子 (ふじおか なみこ) 委員でございます。

藤澤 能子 (ふじさわ よしこ) 委員でございます。

森田 みさ (もりた みさ) 委員でございます。

渡部 裕一 (わたなべ ゆういち) 委員でございます。

また、本日は所用により、大久保 さやか (おおくぼ さやか) 委員がご欠席でございます。

本日の協議会は、18名の委員の皆様にご出席いただいております、過半数の出席となりますので、本協議会は成立をいたしております。

続きまして、事務局の職員をご紹介します。

健康福祉局障害福祉部長 高橋でございます。

健康福祉局障害者支援課長 高橋でございます。

健康福祉局精神保健福祉総合センター所長 林でございます。

健康福祉局健康政策課長 木村でございます。

続きまして、資料の一部訂正がございます。資料1の2頁の図2及び資料2スライド番号2が作成途中のものとなっております。皆さまのお手元に正しく改めましたものをお配りしておりますので、資料の差替えをお願いいたします。

また、本協議会の議事は公開となり、傍聴が許可されておりますのでご承知おきください。傍聴の方には受付にてお配りしました傍聴のルールをお守りいただくようお願いいたします。

続きまして、会長の選任でございます。

協議会設置要綱に基づきまして、委員の皆様のご互選により会長を選出いただきます。どなたかご推薦いただけますでしょうか。

(佐藤 (博) 委員)

原委員を会長に推薦いたしたいと思っております。

(事務局)

只今、原委員を会長に推薦するとのことでしたが、皆様いかがでしょうか。

(委員)

～ 拍手 ～

(事務局)

ご異議がないようですので、原委員に会長をお願いいたしたいと思っております。原委員、よろしいでしょうか。

(原委員)

かしこまりました。

(事務局)

ありがとうございます。それでは、原委員には会長席にお移りいただきたいと存じます。

(原会長)

～ 移動 ～

(事務局)

原会長よりご挨拶を頂戴したいと存じます。原会長お願いいたします。

(原会長)

それではこの協議会の会長を引き受けることになりました原です。よろしくお願いいたします。私は昭和63年から精神科のクリニックを開業して診療しております。コロナの影響もありますので、なるべく短時間に実りある協議を行っていきたいと思っています。議事についての進行にご協力いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

(事務局)

ありがとうございます。

続きまして、協議会設置要綱に基づき、会長から職務代理者をご指名いただきます。原会長お願いいたします。

(原会長)

野口委員をお願いいたします。

(事務局)

会長からのご指名ですが、野口委員よろしいでしょうか。

(野口委員)

かしこまりました。よろしくお願いいたします。

(事務局)

ありがとうございます。それでは、席のご移動をお願いいたします。

(野口委員)

～ 移動 ～

(事務局)

それでは、以後の進行につきましては、原会長をお願いいたしたいと存じます。それでは原会長よろしくお願いいたします。

(原会長)

それでは、議事に入ります。

まず、議事録署名人を指名いたします。

小野 彩香 (おの あやか) 委員をお願いしたいと思います。小野委員、よろしいですか。

(小野委員)

かしこまりました。

(2) 議事

議事① 重点対象に対する取組みの評価への意見・提案について

それでは、議事を進めてまいります。事務局から説明していただきます。事務局よろしく申し上げます。

(事務局：高橋障害者支援課長)

私から「仙台市自殺対策計画における重点対象に対する取組みの評価（令和元年度）」をご説明する前に、仙台市自殺対策計画と本協議会の位置づけについてご説明をさせていただきます。参考資料2をご覧ください。

～ 参考資料2に沿って説明 ～

以上が計画の概要でございます。

次に、これから、評価の内容をご説明するに当たりまして、改めて、本協議会の役割について申し上げます。お手元の参考資料3をご覧ください。

～ 参考資料3に沿って説明 ～

それでは、重点対象に対する、取組みの評価への意見提案について、というところに入って参ります。この評価について、資料1と資料2を用いてご説明いたします。

～ 資料1・資料2に沿って説明 ～

(原会長)

今の仙台市の事務局からの説明に対して、皆さんの方からご質問はございますでしょうか。

(田中委員)

藍の会の田中でございます。去年の時も申し上げていて、委員になって十何年間もずっと言っていますけれど、いわゆるその自死の予防っていうかですね、一次予防がほとんどされてないというふうには私は思っています。労働環境の相談とか、あまり重点施策にないんです。相談機関もあまりないというふうには私は思っているんですけど、いわゆる傾聴、「お話しください」「何とかしてください」というのばかりなんですよ、これを見ているとね。うつ病対策も必要だというふうには思いますが、普通に働いている人をうつ病に追い込む社会的な要因を、具体的に解決するような相談機関をもっと作って欲しいし、そういうところにも支援して欲しいと思います。これまでずっとうつ病対策やっているんですよ。そうではないと私は思っています。

そして、この健康問題というところのご説明がありましたが、病院に行っているかどうか、精神科の病院にかかっているかどうかということも調べていただきたい。もう少し詳しく調べられると思います。通院歴があるかどうかということ、多分、データで、遺族に対する事情聴取のところに出てくるかと思しますので、そこも調べていただきたいというふうに思います。そして、何人ぐらいの人が、通院歴があるのかということですね、せっかく医師会の方もいらっしゃるわけですので、「どのような問題を抱えて」「どのような病院に行って」「どのような薬を処方されているのか」ということですね、仙台市が独自に調査研究をしてもいいのではないかなというふうに思っているんですよ。

そしてですね、ちょっとお聞きしたい。非正規雇用のところも、経済問題のところも、身体疾患のところもみんなそうなんですが、ほぼほぼ、「支援者支援」、「人材育成」ということになっているような気がします。私自身、自死遺族支援をしている者としてはですね、最後にご説明いただきましたけど、親しい人と死別をした経験のある人が、自死率が高いっておっしゃいましたけど、具体的なデータはありますか。私は被災者の遺族支援をしているのですが、被災者であって被害を受けた人たちの中で自死しているのは少なくはですね。家族を亡くしている人も亡くなっていますけど、家を流されたとか、その支援者同士のいろんなトラブルに巻き込まれて亡くなったとかですねいろんなケースもあるんですよ。もしあるのであればお示しいただきたいというふうに思っています。津波で家族を亡くした人の自死率が高いのかどうかということをおね。先ほど課長がおっしゃいましたけど、高いのであればお示しいただきたいし、自死遺族の自死率が高いというのであればそれもお示しいただきたい。私はそれを防ぐためにやっているの。そしてですね、私自身が自死遺族支援やっていて、傾聴だけでは駄目なので総合支援をしています。皆さんを全体的に見ていると、自死遺族支援は生ぬるいんです。はっきり言って私たちのような藍の会とか全国自死遺族連絡会のようなことはまずできていません。そういうことができていなければ総合支援にはなりません。それは、私自身が自死遺族として支援してそう思っているんですね。なので、他の支援も推して知るべしだと思っているんですよ、はっきり言って。本当にハイリスク者として自死遺族支援や、ハイリスク者の人たちを支援して助けたいと思っているのであれば、支援者支援とか、傾聴とかっていう話では助からないんですよ。そういうことも含めて、私は、仙台市にはもう少し前に進んで欲しいというふうに思って、十何年間委員やってきてずっと言い続けて大して変わってないってのは、私の本音です。ぜひ、もう少し一歩進んでいただきたいというふうに思っています。

(原会長)

はい。ありがとうございます。ちょっとよくわかんなかったんですけども、自死に追い込まれるような体制に対しての対策をとって欲しいとおっしゃったのでしょうか。

(田中委員)

普通に働いている人、普通に暮らしている人が、学校もそうですけど、働いている労働者もそうですけども、いきなり生まれつきうつ病ではないのですよ。うつ病に追い込むような社会的な要因を取り除く施策にもう少し力を入れてくださいということですよ、具体的には。

(原会長)

具体的におっしゃっていただけるとありがたいです。

(田中委員)

今までやってきた試しがないんですよ。やれるかどうかも含めてお答えいただきたい。

(原会長)

質問が二、三ありました。それについて、わかる範囲でお答えください。

(事務局：高橋障害者支援課長)

どこから申し上げればというところはありますけども、自死遺族の方のことを申し上げた点については…

(田中委員)

データがあるんじゃないんですか。

(事務局：高橋障害者支援課長)

多いとか少ないとかということを上申したのではなくて、関連性の強さということで考慮する必要があるということを上申しました。自死の危険因子と言われているという国の研究ですとか、ガイドラインで指摘されているというところから、そのように上申したというところでございます。また、自殺未遂者の通院歴のことですけれども、とられている統計からはわからない状況でございます。最初におっしゃっていましたが、勤労者の方の困りごとですとか、そういったことに対応する事業としては、今年度10月から始めましたけれども、「暮らし支える総合相談事業」ということで、専門職が相談をお受けして、ケースワーカーが継続的にフォローしていくといった事業を開始したところでございます。以上でございます。

(田中委員)

追加でいいですか。私はハイリスク者会議にも参加していますけれども、未遂があった時に病院搬送されますが、その時に質問票とかたくさんあって、病院に通院しているかということが分かるはずなんですよね。分かるようになっていきますよね。質問票ありましたよね。そういうのが分かると思っているんですけど。例えばその未遂をしているケースとか、何回か未遂を繰り返して亡くなった人の中で、通院歴があるかというのは、そういうのを見ればわかるはずですよ。病院に運ばれた人の質問票というのは、昨年度やったかというふうに私は思っているんですけども。

それと何だろうな。先ほども言っていますけれども、もし自死遺族とか震災の遺族をハイリスク者、危険因子があるというって、未遂者と同じように三次予防として、ハイリスク者として扱って、予防していかなきゃいけない、支援していかなきゃいけないというのであれば全く足りないです、あなたたちがやっているのは。私みたいにやらないと、24時間体制で。

(原会長)

そういった意見ね、おっしゃるのはいいんですけど。

(田中委員)

いや、やっていないから言っているんです。やっているようなこと言わないで欲しいんですよ。私はあまり支援してもらってないのでね。助からないですよ。助けているようなこと言わないで欲しいんですよ。助からないですから、今のようやり方では。

(原会長)

よろしいですか。他のご質問ございませんか。ご意見でも結構です。

(森田委員)

司法書士会の森田と申します。資料を見ますと令和元年度までの数字が書いてあるのですが、皆さんも今年の状況はおわかりだと思うのですけれども、今年、若年の女性の自殺が激増しているというところを踏まえて、緊急の何かしらの対策をやっているのか或いは考えているのかっていうところがあれば教えていただきたいと思うのですけれどもいかがでしょうか。

(事務局：高橋障害者支援課長)

自殺者数の暫定値というものが公表されており、森田委員おっしゃった女性の自死が増えているといった報道がなされているところです。公表されています暫定値では、自死された方の属性などをクロス集計して把握することができないため、詳細な分析は確定値が提供されるまで待たなければなりませんけれども、20代・30代の女性の自死が増加していることは承知しております。私どもとしては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大ということで、やはりその経済的な要因から自死に追い込まれる方が増えるのではないかという想定もありましたので、補正予算を組み、先ほど申し上げた、「暮らし支える総合相談事業」を取り急ぎ開始したというところでございます。こちらで様々な困りごとに対応していくという中で、お受けした相談を分析して、対応できるものに高めていきたいというふうに考えております。以上です。

(原会長)

よろしいでしょうか。ではどなたか。質問及び議論でも結構です。

(反町委員)

いのち支える自殺対策推進センターの反町です。森田委員が質問されたこととも関連するのですが、いのち支える自殺対策推進センターでは、「コロナ禍における自殺の動向に関する分析(緊急レポート)」を10月21日に公表しております。その中で、7月から自殺者が全国的に増加して、レポートが出た後ですけれども、特に10月には全国の自殺者が前年比で40%増加、女性に関しては80%以上増加という数値が出ております。関連したこととしてはいろいろあるんですけど、女性の方が非正規労働者が多く、非正規労働者の減少数が女性の方がはるかに多いということはあるかと思えます。宮城県のデータを見たところ、10月は去年が29人亡くなっていたのが今年は41人亡くなっていて、仙台市を含む宮城県としては4割、前年比で増えております。そこで、仙台市の方で分かれば、もう少し詳しい動向というか、今年の数値を教えていただければと思うのですが、いかがでしょうか。

(事務局：高橋障害者支援課長)

反町委員がおっしゃったように、仙台市におきましても、女性の自殺者数が増加しているという状況でございます。確定値と、今年度の暫定値を単純に比べるということはできませんが、月毎の数字を比較いたしますと、半数以上の月で、前年を上回っているような状況はございます。ちょっと40%増とまでいえるかどうかは確かなことはいえないのですが、確かに増加しているというところがございます。

(反町委員)

全国的にも40%増というのは10月になってからでその前はそんなに大きくはなかったのですが。

(田中委員)

聞いていいですか。私が非常に疑問を持っているのは、コロナによって増えたのかどうかということのデータはまだ調査、精査されてないというふうには思っているんですけども。もともとの原因や悩みがあってコロナに多少影響されたのか、もしくは、本当にそうではなくて普通に暮らしてきた人がコロナで経済問題に陥ったりして亡くなったのかということや、無職もそうですけど、もともと無職なのか、それともコロナによって失業になったのかっていうことがやっぱり、詳しくデータを精査していただかないと、対策の取りようがないというふうに思っているんです。もともと、未遂者は女性の方が男性よりも3倍くらい多く、その中で既遂に至る人が男性は多いというデータがきちんとあ

るかと思うので、女性が増えたのであれば未遂者はそのままで、未遂者も増え、既遂も増えたのかとかですね、そういうことを詳しくデータを出して検討していかないと、コロナの影響なのか、もともとあった問題があつて悪化したのか、それともそういったことに関係なく、いろんな問題で自死に至ったのかということとちゃんと分けていただかないと対策の取りようがないと私は思っています。

もともと一次予防を放置してきた結果だと私は思っています。もともとの危険因子を、女性の貧困もひとり親家庭の貧困もすべてそれは、これまでそれに手をつけてこなかったことのあらわれだと私は思っているんですけど、個人的には、仙台市もこれからコロナについてもやるようですけれども、そのあたりをですね、わかる範囲でいいので、きちんと精査して、ある程度データを出して、そこに向けて対策をとっていただきたいというふうに思っています。私は前から言っていますけどタクシーとか運転関係のところとか旅館業者のところはもともと非常に厳しい状況の中で働いていて、そこで自死率が非常に高い、年間タクシー業界で十何人も死んでいるということが分かっているわけなので、そこにピンポイントで対策を打ち出していき、そういうふうにしてやって欲しいとずっと提案しているので、ぜひ今回また、コロナのこともあるので、そういうことを調べていただいて、そして全員一度に助けることは難しいですけど、本当にピンポイントで一つずつやっていただきたい。ぜひ、今回こそ、15年目を迎えます、やってください。いかがでしょうか。やっていただきたいんです。ぜひぜひお願いします。

(事務局：高橋障害者支援課長)

障害者支援課の高橋です。新型コロナによる影響につきましては、先ほども申し上げましたが仕事や収入が減るとか、あるいは失われるといった経済生活面に、まずは強く現れるものと思われませんが、暫定値で見ますと、自死の原因動機では、経済生活問題を動機とするものはそれほど増加しているわけではない状況です。そういったことも踏まえまして、当面はどのような内容であっても、困っていることはすべて相談できますということコンセプトといたしまして、相談事業を年度途中から開始したわけです。今後、この事業の中で寄せられる相談内容を整理分析しますとともに、国全体や他都市の状況などの情報も収集しながら、新型コロナの感染拡大が市民生活にどういった影響を及ぼしているのかについて、引き続き見極めて参りたいと考えております。以上です。

(原会長)

ありがとうございます。それでは他にいかがでしょうか。ご質問ご意見ございませんか。

(清治委員)

仙台市医師会清治です。今までも皆さんからご意見が出ていますが、未遂者の把握ですね。救急外来とか総合病院の救急のほうに、先ほど田中先生の方からアンケートのようなものが出ているというお話がありました。このコロナ禍で、やはりコロナの対策・対応も非常に総合病院としては大変だと伺っていますけれども、どうもやっぱり自殺未遂される方の数も増えているようだという話も聞いております、医師会の方で。その中で仙台市としては、未遂者の把握というところに関して取り組みは行われているのでしょうか。

(事務局：林精神保健福祉総合センター所長)

仙台市精神保健福祉総合センター所長の林でございます。未遂者支援は、田中委員にも検討のご協力をいただきまして、「いのちの支え合い事業」ということで、ハイリスク者支援の中で、自殺未遂のために救急搬送された方を対象として支援を行わせていただいているものでございます。先ほど田中委員がおっしゃった、精神科通院歴がわかるはずだというのは、その対象になった方の通院歴でござ

いますので、ちょっとまだ数がそんなに多くないので、統計学的に意味のあるような数字がとれているわけではございません。確かに、通院歴を有する方も中にはいらっしゃいます。

精神科のご質問に対してなんですけれども、「いのちの支え合い事業」の周知に関して、仙台市立病院、東北医科薬科大学など、救急搬送される方々を受け入れる病院の中で精神科の病床を有する病院と密に連携をとらせていただくとともに、精神科病床を有しない病院にも、事業の説明をさせていただいております。コロナ禍のため、なかなか病院に足を運ぶこと自体が難しくなっている、受け入れていただくことができない中で、電話なども含めて、昨年度からかなりPRさせていただいております。精神科病床を有しない病院からもご紹介をいただいているところでございます。

(清治委員)

ありがとうございます。私が話を聞いたのは、精神科病床を有しない病院の先生からそういう話があったので、おそらくまだやってないのかもしれないですね。

(事務局：林精神保健福祉総合センター所長)

そうですね、例えば大量服薬なさった方などですと、即時退院されてしまうことが非常に多いものですから。それでもだんだん知られて、ご利用いただけるようにはなってきております。ありがとうございます。

(原会長)

その他どうでしょうか。質問等ございませんか。はいどうぞ。

(鈴木委員)

みやぎの萩ネットワークの鈴木と申します。質問させていただきたいのは、若年層の自殺に関してなんですけれども。学生、学校に通っている人たちの人数を教えてください。スクールカウンセラーの配置ですとか、いろんな対策を仙台市では、昨年度からやっていたと思いますが、今どのぐらいの人数がそうなっているのかですとか、対策を行って、それがそのフィードバックされているのかどうかというところをお聞きしたいです。

(事務局：高橋障害者支援課長)

スクールカウンセラーのところに通っている人数ということでしょうか。通年の人数は把握しておりません。申し訳ございません。

(鈴木委員)

いじめですとか、そういう困りごとを相談している生徒の数というのはわかるでしょうか。

(事務局：高橋障害者支援課長)

協議会に向けてそこは準備していなかったものですから、それは後ほど、教育局に問い合わせたいと存じます。

(鈴木委員)

わかりました。

(田中委員)

仙台市はいじめ自死が非常に多い、全国的に恥ずかしながら、非常に有名くらい非常に多いんですけれども。前は、去年は教育委員会も事務局として参加されていたかと思うんですけども、若年者のところが非常に問題で、この前、郡市長に不登校といじめのアンケート調査をした団体なども、結果を報告しに行ったりもしていたかというふうに思うんですけども。それをもう何年も前からそういうふうをお願いしているんですけど、教育委員会と連携しながら、いじめによる自死とか人数とかですね、そして不登校の数とかいじめの数とかですね。そういうこともちゃんと把握してやらないと自殺対策にならないんじゃないですかね。どうですかね。仙台市は特にいじめ、子どもたち児童生徒の自死が多いところです。つい3日4日前にも19歳の女子学生が飛び込み、電車事故で亡くなったじゃないですかね。線路で寝ていたっていうのでね。東仙台の方ですかね。そういうのもある。19歳ですよ。そういうこともあるので、若年者、本当に19歳未満は非常に多い。仙台市は多いというふうにはずっと多分把握してきているかと思うので、ぜひ鈴木委員がおっしゃったように教育委員会で去年1回だけ連携するんじゃなくて、きちんと連携しながら、そういうデータとかも把握していないと何のための自殺対策の会議なんですか。子どもの自死を防ぐためにというのであれば教育委員会と一緒にやらなきゃ駄目なんじゃないですか。どうですかね、今後やっていただきたいと思うんですけども。去年、おやりになっていたかと思うんですけども。今年はなんかメンバーにも校長会もいらっしゃってないし、全くね、2名とも校長会がいらっしゃってないし。何か子どもの自死、若者の自死が、仙台市は全国的にもっとレベルが高いと言いながら、非常に、ワーストだと言いながら全然なんか、委員の配置もそうですけど事務局見ても、子どもに関係する皆様があんまりいらっしゃってないというふうには思っているんですけども。そのあたりも踏まえて、それだったらそれで事務局でちゃんと数字なりなんなり把握していただきたいんですね。今日のこれでもですね、去年は、1年間で亡くなった19歳未満の子どもの数とかいじめの数とかっていうことで答えていただいたりしたんですけど、今回何も載ってないんですよ。

(鈴木委員)

人数は、資料に載っていますが。

(田中委員)

子どものいじめ。いじめとか、載ってない。

(鈴木委員)

委員の中には中学校関係の方もいらっしゃるので、中学校関係の委員の方にぜひ、ご意見というか、今後の対策について仙台市の方にいただければというふうに思います。

(原会長)

ありがとうございます。はい。他にいかがでしょうか。はいどうぞ。

(千葉委員)

鶴が丘中学校で養護教諭をしている千葉と申します。現場で身近にいる子どもたちに接している中で、「死にたい」とか「何か死にたいような感じがする」とかいう、それから、そのような子どもを持つ保護者と接している中で、今回この資料を見て、精神的疾患、いわゆる鬱病について、大きくクローズアップはされてはいるんですけども。声に出せない子どもたち、自分の気持ちを押し殺している子どもたちへのアプローチをどうしていけばいいのかなっていうのを一番、子どもたちに接して思

っている部分でもあります。今回この会議に参加するにあたって、参加される方々の組織をインターネットで見させていただきました。私事なのですがけれども、6年前に自分の親を自死で亡くしているんですね。それで、遺族に対しての支援のネットワークもこんなにあるんだっていうのをこのとき初めて知ったので、そういう点で、遺族に対しての支援のあり方というか、アナウンスの仕方とか、難しい面もあるのかなと思ったのですが、助けを求めないと助けてもらえないっていうようなところではなくて、声に出せない、相談できない人達への支援について、どうしていったらいいのかなっていうところで私自身が課題に思っているところです。精神科医や専門医のところにつなげた後、私たち学校職員はその子どもたちに対してどのような支援をしていけばいいのかということも課題であって、病院につなげたからいいということではなくて、この子どもたちが将来、自死を考えないで生きていけるためにどうしたらいいのかなっていうことも、私の中でも課題の一つとしてあります。すみません。ちょっとうまく説明できないのですけれども。申し訳ありません。

(原会長)

はいありがとうございます。とても大事な意見だと思うんですね。声を出せる人はそこで繋がっていくというのがあるんですね。声を出しにくい人とか、そういう方に対する心配りがどんな形になされているのかというのは、それぞれの組織、学校や企業がそういうところに目が配られているような関係性というものを作っていくというのは一つの大きなポイントではないかなと思いますね。また、私たちも被災地ではアウトリーチという手法をとって、家庭訪問したりして、声の出せない方の支援をしていて、そういうことは多分一般的で、仙台市でも行われていると思いますし、被災者支援の中ではそういう方法を取っている方が多いのではないかなと思いますね。

(田中委員)

追加で、私の意見ですけど。私自身の体験も踏まえてですけど、声を上げている人も助けてくれないんですよ、実際ね。たいして。申し訳ないけど。私自身もそういう体験をして、たらいまわし状態にあって、みやぎの萩ネットなど、いろいろなものを立ち上げたんですね。ワンストップでできるような、専門家のそれぞれの専門性を持った団体のネットワーク、人のネットワークを作ったんです。自分でよく整理できない、たくさん複合的にあると自死の問題は言われていますけれど、私のこの問題はどこに行けばいいとか、整理できない状態の中でごちゃごちゃしちゃっているわけですね。それを、専門家の1ヶ所に相談したらそこで整理してくれて、そしてワンストップでその人の問題を解決していくと。あっちに行こう、こっちに行こうと、苦しんでいる人たちみずから整理するのはなくてですね。そういうふうなネットワークを作っていくって欲しいというふうには私は思っています。みやぎの萩ネットワークを立ち上げているんですけども。それと同時に、よく支援者の皆さんは今のような、反論して大変申し訳ないですけど。声を上げられない人をつて、もちろんそれは大事です。でも、まず声を上げている人を確実に救ってください。助けてくださいって声をあげている人も助けないで、苦しいと声を上げられない人を探すのは至難のわざですよ。それよりは、せめてせめてです。死にそうなんですって声をあげている人の命は救っていただきたい。そこから、同時にその声を上げられない人をどうするかって考えていけばいいですけど、声を上げられない人が最優先ではないです。助けられてないですから。まず助けてからです。私もそういう経験して死ぬほど苦しい思いを遺族になってしたことがあるので、たらいまわし状態でしょうがなく自分で会を立ち上げたっていう立場ですから、とてもよくわかります。仙台市とかいろんなところに、精神保健センターもはあとぽーとも含めていろんなところに電話して、たらいまわしされて終わったと。なので未遂を2度していますので、よくわかります。もちろんね、声を上げられない人も大事ですけど、あげている子どもたちで

言えば、SOSを出している子どもを救って欲しいというふうに思います。ぜひたらいまわしのないようですね。生きたいと思って繋がっているわけですから、お願いします。

(原会長)

はい。ありがとうございます。他にどうでしょうか。ご意見。はい。どうぞ。

(反町委員)

すいません。資料2の若年者対策、スライド5になりますけども、若年者の生活苦の問題もありますけど、方向性4として若年者の自殺対策を実施する機関と生活困窮者支援機関との連携強化というのが挙げられていますよね。新たな事業として、ワンストップ相談の取り組みが実施されているというのは素晴らしいことだと思うんですが、今全国どこでもそうですけれども仕事を失ったりして、住居確保給付金とか緊急小口資金、総合支援資金とか、様々なそういうものを受けに相談に殺到していて、おそらく仙台でも、多分そうだろうと思うんですよね。そういう人たちの中に、死にたいと思っている人が一定程度含まれていると思うので、その人達を対応できる場所にどうつなげていくかというところが非常に求められるところではないかと思います。これまでも非常に重要なところだったと思いますけれど、コロナ禍の中でさらにそこが重要になってくると思うのです。そのあたりについて、別に責めるつもりではなくてちょっと指摘だけさせていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

(事務局：高橋障害者支援課長)

ありがとうございます。先ほど申し上げました、暮らし支える総合相談事業につきましては、生活困窮者の支援をしている「わんすてっぷ」というところと一体的な体制で実施をしております。今、反町委員がおっしゃったような方も支援につなげられるような取り組みにしていきたいということで進めております。以上でございます。

(原会長)

はいありがとうございます。どうでしょうか他にご意見、どうぞ。はい。

(野口職務代理者)

東北大学の野口でございます。一つはですねちょっと確認したい点がございます。資料2のスライド9、ハイリスク者に関するグラフがあるところですけども、「減少傾向にない」という判断をしているかと思います。ここは、例えば、若年者の数値の出し方とは違って、自殺者全体に占める自殺未遂歴のある自殺者の割合ということですので、これはどちらも同じように減ったら、割合としては変わらなくなるということになります。ですからここは少し細かなチェックが必要などころではないかなと私は思うので、データの見方、縦軸の出し方が種々違っているところがあるので、そこは確認していただきたいところです。それから、教育に関して田中委員、或いは他の委員からも出ましたけれども、今学校現場では、例えば授業の中で、精神的な健康あるいは何かあった時の対応ということをお教えるということが、保健の科目あるいは他の科目だったかもしれませんが、その中で具体的にやっているはずだと思います。早期から自分自身の精神的な健康のところをどう理解してどう対応していけばいいのかということをお身に付けていく。これは非常に大事なことだろうと思います。それから、別の会議のところでは若年者対策のところのお話を聞いてきたのですが、高校生ぐらいになって思春期のところに入ってくると、自分が少し具合が悪い、調子が悪いなどなっているけれども、先ほどお話が出たように、なかなか具体的にSOSを出せないという状況になっている。その時に、どのようにしたら

その例えば、一本の敷居といいますか、そこを低くできるのか。その取り組みというのを、これは宮城県の方でしたけども、宮城県が精神科と協力しながら、具体的に高校と連携して取り組んだというようなことがあったかと思しますのでその辺りのところも確認していただきたいところです。本当に若い人たち、特に学齢期にある子どもたちが、ちょっと具合が悪いな、ちょっとおかしいなと思ったときに相談ができるような体制、先ほど田中委員の方からは、うつになる前の要するにトリガーになるようなところでの対策をというお話がありましたが、そういったところも含めたものが求められているということだと思います。そしてそういったときの、これがワンストップになれば一番いいと思いますが、自分自身の対応として、どこにいけばいいかがしっかり分かっているという教育的なことぜひやっていただければと思います。以上でございます。

(原会長)

はい。どうもありがとうございます。他の委員の方からいかがでしょうか。

(田中委員)

すいません、私も。以前も申し上げていますが、スクールカウンセラーの中で、仙台市の場合は都会ですけど地方都市なので、臨床心理士の資格を持ってない人が多数勤務しているというふうな実態があると聞いています。以前にも宮城県臨床心理士会の方が委員として参画なさっているので、スクールカウンセラーとして資格を持ってない方がいるので、専門的な研修などをやって欲しいとお願いを続けてきています。仙台市もスクールカウンセラーの数はそれなりに、何億ってつけて、ここ何年かで人数増員したかというふうに思いますけど、内容が問題なんです。実際はね。資格を持っていない人で、実際にいじめ自死が起きた学校に調査に行ったときですね、私は第三者調査委員会の委員もやっていたので、学校調査に訪問していた時に、資格のない人でまだ20代前半の人で、全く無資格で、今勉強していますっていう女の子のようで。カウンセラーの部屋が全く殺風景で、カウンセリングをするような部屋とはとても思えないというような部屋だったんですね。とってもとっても何日これは放置したの、ゴミもほこりだらけだし、本もないし何もない。そしてホンコンという植物がありますね、観葉植物。あれが茶色に枯れてしまっていて、半年以上も水をやってないのか何だかわかりませんが、そんな状態のカウンセラー室でした。そして、教室の真ん前にカウンセラー室があるのですよね。教室の真ん前に。それは入りにくい。他のいいところにも調査に行きましたけれど、うまく活用できているところ、週2回、目いっぱい活用できているところは、いじめもやっぱり少ないですし、自死はもちろん起きてない。そういう学校も調査に行ったんですけども、やはり配慮されています。とても配慮されてその代わり予約でいっぱいだっていうふうに、校長先生から報告を受けています。そのようにうまく、せっかくの人材なのでね、臨床心理士会さんと、うまく連携取りながら、専門的な研修をやっていただきたいというふうに思うんです。そうすれば人材がうまく活用できて子どもたちのためにもなり、というところになるのではないかなと。そう思うので、ぜひご検討いただければと思います。

(原会長)

ありがとうございました。はいどうぞ。

(小野委員)

特定非営利活動法人スイッチの小野です。若年者に向けての対策のところ、方向性として理解促進と人材育成ということを挙げられているところ、本当にその通りだと思います。実際に、私どもは小さな法人ですけども、今、大学生に授業していることがあります。それは就活に向けての授業な

んですね。若年者が興味を持つものは、その時その時のステージで本当に違ってきていて、例えば大学生で今、我々がやっているのは2年生なんですけれども、大学2年生を対象に就活のことを考えて学校側が提供する授業の中の一つの基礎の部分で、やっぱり先ほど野口先生がおっしゃっていたように、コミュニケーションスキルとして自分の状態を知っていたりすることが、他者理解や自己理解にとっても繋がる、ひいては自分のいいところを見つけていけるという具合に結局就活に繋がっていくという流れになっていきます。何が言いたいかといいますと、そのように若年者が非常に興味のあるものが、小さな単位、ステージで本当に大きく変わっていくので、予防のセルフケアであるとか自己理解、他者理解というものを上手く動機とコミットさせて、教える機会や知識を提供する機会を多くつくるのがとても大事ではないかと思っています。今までの取り組みを見て、人材育成ということで、各学校ですとか、そういったことに興味のある方々がたくさんこの知識の部分を勉強したりしていると思いますけれど、どちらかというとそのあとの活用の部分が問題になると考えます。これからの方向性の部分では、それぞれの学校やステージの中で課題があるものの中に、簡単に取り込んでいける。動機さえあれば、実際に授業では最後に感想をチャットで、今はオンラインで、全員が受講して最後にチャットで感想とかをバーッとくれるんですけれども、興味のない方でもこの話に出会うとすごく自分の隣人のことを気にしていたり、自分がこういったことでよかったんだと思えたり、声をかけてみようと思うとか、コロナだからこそなんでしょうか、そういうのが上がってくるんですね。興味のある方は、そういう所に行って自分から求めることができたり、集まった場で聞くことができたりすると思うんですけれども、この内容は興味のない方が聞いても、自分の、あるいは周りの人とか気になる人を想像できる内容になります。ぜひ実際の人材の活用の部分でやった方が具体的にどういうふうに落とし込んでいくのかということまで、助言ですとか実例なんかを上げながら進めていけると、より具体的な方向性としてはいいのではないかと思うので、検討していただけたらと思います。以上です。

(原会長)

はい。ありがとうございます。事務局の方から今の意見に、一言。

(事務局：林精神保健福祉総合センター所長)

精神保健福祉総合センターの林でございます。本当に貴重なご指摘ありがとうございます。今のご意見に、いわゆる真ん中のお答えにはならないのですが、近いものとして精神保健福祉総合センターでYELL（エール）という活動しております。これは東北福祉大学や宮城大学、仙台白百合女子大学などいろいろな大学から、大学生の方々に自主的にご集まりいただいて、大体が精神保健福祉士さんの卵が多いですけれども、その方々に、お友達の調子が悪そうなときにどんなふうに声をかけるのかとか、相談をした時にどんなことが起こるのかとかを、ご自分たちの目線で考えて、啓発資料を年に1種類ずつ作っていただいたり、教官の先生方のご協力をいただいたりして、YELLの学生が他の学生のためにゼミでお話をさせていただくということも行っております。やはり、同じ立場の学生さんたちが話をするということで、それを聞く学生さんたちの関心も高いですし、前後でアンケートなど取らせていただきますと意識が結構変わったりしております。今後も、そのような活動を広げながら、学生さんたちに響くように届けていきたいと思っております。どうもありがとうございます。

(原会長)

はいどうもありがとうございます。その他、どうでしょうか意見ございませんか。はい。佐藤委員どうぞ。

(佐藤(博)委員)

仙台市立病院の佐藤です。令和元年までの振り返りということと、今のコロナの令和2年のことの2つがあると思いますけれども、まず令和2年のコロナの件につきましては、やはり自殺未遂者が増えていて、我々の病院のほうでも実数が多くなっております。失業であるとか経済的な問題ということがきっかけという方もたくさんいらっしゃるんですけども、それ以外に質的にコミュニケーションが面と向かってできなくなってくるということも、幾つという数ではいえないのですが、かなり多いという印象です。これはやはり、経済的な問題は景気などに影響されると思うのですが、景気以外で、コミュニケーションが面と向かってできないということは質的にも違うのかなと思っています。ただ面と向かってコミュニケーションを取るとなると、ここで感染が拡大する形になりますので、なかなか両立が難しく、根本的な解決はワクチンの開発であるとか、そういうような問題なってくるということで非常に難しいなと思っています。両立できるように頑張っていこうとは思っておりますが。我々の中では、コロナは呼吸器などをむしばむというだけでなく、人間関係をもむしばむというふうに思っております。本当にコロナは人間関係をむしばむ病だなと思っています。以上です。

(原会長)

はい。ありがとうございます。そろそろお時間も来ていますけれども、皆さんの方からご意見どうでしょうか。はい。どうぞ。

(鈴木委員)

今回教育関係、以前は校長会とか、3つぐらいの団体の偉い方が委員として入っていらしたんですけども、ほとんど教育関係が委員の中に入っていないようですが、何か理由があるのでしょうか。

(事務局：高橋障害者支援課長)

この協議会に先立ちまして、庁内の連絡会議を行っております。そこで対策の評価をまとめております。そこに関係する課の参加を得てまとめておりますので、今日の協議会には、私ども、中核となる3課が出ているというところでございます。

(鈴木委員)

委員の方です。

(事務局：高橋障害者支援課長)

失礼しました。委員につきましては、今回、教育関係といたしましては、千葉委員に養護教諭という立場からお入りいただいております。より実務実践の現場で活動されている方をということで人選をさせていただいたところでございます。

(鈴木委員)

ご意見を伺うには、とてもいい人選だと私は思うのですが、結局学校運営は校長先生次第というところがあると思いますので、校長先生にもぜひ入っていただければいいかなというふうには思います。

(事務局：高橋障害者支援課長)

はいありがとうございます。学校運営という観点も含めて庁内連絡会議の方で、整理していくということにしているところでございます。今回の委員構成としては、より実践実務に近い方ということで、人選したということでございます。

(原会長)

はい。よろしいでしょうか。はいどうぞ。

(藤岡委員)

産業カウンセラー協会の藤岡です。初めての会議でどのように発言をしていいのかというところで迷ってしまいまして、見当違いのことを申し上げていたら大変恐縮ですけれども。今日若年層の自死というところに、かなりお話を割いていらっしゃると思いますが、当然ながら児童生徒さん方への支援というところが手厚くなっていくのは、若い命を守るためには大切だと思います。それを見守る先生方に対しての支援が、おそらく入っていらっしゃると思うのですが、もう少し目に見える文言で入っているとよいと考えます。先生方もご自身に余裕がない中で、生徒さん方のことも見守ってということになると、本当に厳しいのかなというところを、実際に私どものカウンセリング等にお見えになる先生方からも伺いたします。ただ学校の中にいらっしゃるスクールカウンセラーの方に相談というのは、やはり他の方の目もあるので、行きづらいところがあるのだらうなというところを感じております。ぜひこうした方向性のところも、勤労者のメンタルヘルス対策にもつながることかと思しますので、見当違いでしたら申し訳ないですが、意見として申し上げたいと思ひまして、お時間いただきました。失礼いたします。

(原会長)

ありがとうございます。どうぞ。はい。

(反町委員)

全然違う話で恐縮ですが、委員の話が出ましたので。今までの経緯なんか全くわかりませんが、警察や消防の方は現場を見ておられるし、おそらく関係の方からお話も伺われるだろうし、それから自殺未遂のデータが消防にはあるのではないかと思いますので、その辺もまたご検討いただければと思います。以上です。

(原会長)

今の点はどうですか。はい。

(事務局：高橋障害者支援課長)

ありがとうございます。警察とは、日々業務を通じて関わりもありがとうございます。消防についても、救急搬送のデータなどは、これまでも取り寄せているところでございますので、引き続き、その辺りの統計も含めて、分析して参りたいと思います。

(原会長)

どうでしょうか委員の皆さん。はい。はいどうぞ。千葉さん、お願いします。

(千葉委員)

はい。申し訳ありません。各局参考資料のこの厚い資料にあるように、いろいろな取り組みを実施していますけれども、学校現場では教育局の指導のもと、野口先生がおっしゃったように、ソーシャルスキルを組み込んだり、いじめ防止に関する行事、教育相談活動、ストレスを緩和する方法などの授業を行っています。ゲートキーパーとなりうる職員に対する悉皆の研修会も、今年度はコロナでなくなった部分もあるのですが、多くなっております。喫緊で明日養護教諭を対象に、いじめ防止研

修会があり、その内容が、希死念慮それから自死行動を起こす人たちの行動の基本的理解というところで、自死に関する研修会も多くなったなと思います。学校が保護者に配布するパンフレット等も多くなったなということを感じています。それは、この資料からもわかりますけれど、この2年間で、各局で取り組まれた内容がすごく多くなっていて多岐にわたっている証拠だなということを感じています。取り組みの方向性として、現場にいて思うことですが、今後の対策として若年層において、今後ますますインターネットを活用した相談ツールの普及が今後もっと重要になるのかなと思っています。現実の世界に自分の居場所を見いだせない子どもたちが多くなって、インターネットの世界で自分の立ち位置を見つけている子どもたちも多くなります。インターネットの中には自死をほう助する人間もいるので、その中で正しく自分を導いてくれるような機関や医療機関へのアクセスができるような体制が今後さらに望まれるということを思っています。今現在、時期によって、配布されているパンフレットはこれからも継続して配布していただきたいと思います。今日もいじめ防止に関する電話連絡相談の内容が書かれたパンフレットを子どもたちに渡しました、そういうものを継続して行っていただきたいと思っています。さきほど野口先生がおっしゃっていただきましたが、学校と精神科の連携ができるような体制、研修会を行った後に「じゃあ私たちはどうするの」というところで、どこにつなげていけばいいのかというところがいつも疑問に思うところなので、学校と精神科が連携できるような体制もあるといいなということを感じました。ありがとうございます。

(原会長)

はい。ありがとうございます。はい。どうでしょうか他にもご意見ございますか。はい。

(田中委員)

時間も時間なんで私ばかりしゃべって申し訳ないなと思いながら、すいません田中です。諦めてください。はっきり言いますが、精神疾患、精神科、精神科、精神科。もちろん精神科につなぐことも大事です。何度も言います。自死は、社会的な要因で追い詰められた末の死であるということをお話しています。社会的な要因です。精神的に追い詰められている要因があるということです。個人のせいにしていただきたくないというふうに思います。個人の資質の問題、性格の問題、発達の問題、特性の問題と学校ではよくおっしゃいますけど、それももちろんあるでしょうけれども、そこからは何も見えてこないというふうに思っています。だから亡くなった人も、私は一息子を亡くしていますけれど警察官の一息子も社会的な要因が一因だと私は思っています。親である私はそう思っています。そして学校、幼稚園すべて周りの人、親族も含めですね、職場の関係も含めて、そういう問題だと私は思っています。だからこそ教育が大事だというふうに思っているんですね、皆さんの言っておられることを聞いていると、もちろん医療につなぐことも大事ですけど、肯定感とか何かいろんなことを仙台市は言っていて、パンフレットはとても素敵なんです。仙台市ってとてもパンフレットは素敵で、荻上チキさんですか、仙台市は非常にすばらしいと褒めているんですけど、実際は子どもの自死が非常に多いところなんです。だから箱物とかパンフレットを素敵に作るのも必要ですけど、中身をきちんとしていただきたい。そして個人、決して特殊な人間ではないのです。私も普通に生きてきて、うちも主人は国家公務員で、息子も地方公務員でそういうふう生きてきて、経済的に何も問題はありませぬし、精神疾患も誰もおりませぬ、先祖代々。私の方も主人の方も。それでも息子は亡くなりました。だから特別に自死遺族という人種がいるわけではないので、皆さんの身にいつ起こるかわからないというようにところで接していただきたいんです。非常に偏見と差別を感じます、自死の問題とかですね。だから相談してくださいと言っても相談したくないという人たちもたくさんいると思いますよ。もう少し謙虚になってですね、やはり相談をしていただくと。「受けるんだ」ではないんです。だからお人柄磨きをしてくださいと、もう10何年前から言っているんですけど、私自

身の自戒も込めてですね。私が一番まずいなと思っているんですけど。実際に相談を受けるということは、癒したいとか治してあげたい、助けてあげたいとか、そういうのではなくてですね、一緒に生きていきましょうよという、本当に支援っていうのは低姿勢で「生きていてくださいね」とお願いする立場のような感じでしていただきたいですね。それをぜひ、皆さんに考えていただきたいなというふうに、最後に私の自死遺族としてのお願いです、皆さんへの。いつか誰かがなるかもわからないのが現在です。突然なりますから。私はテレビで見て、田中さんのような人がいるんだと思って全然外の人だと思っていたら、身近に遺族になっちゃいましたという人たくさんいるんですから。それが現在の社会だというふうに思っていたきたいです。どうぞよろしくお願ひします。ぜひ減らしてください。私も減らすように頑張ります。

(原会長)

はい。ありがとうございます。それでは田中さんにまとめてもらったので、この回はよろしいでしょうか。他に皆さんのご意見がなければ、時間も押していますので、その他の議題があれば、その他の議題に移って終わりたいと思います。今日協議された内容は、仙台市の方でもう一度協議会に諮っていただいて、実効性のあるものに変えていただければと思いますのでよろしくお願ひします。

議事② その他

特になし

(3) 閉会

(事務局)

ありがとうございました。本日ご議論いただきました内容につきましては、議事録として事務局の方で案を作成いたします。委員の皆様には加除修正にご協力をお願いいたします。事務局の修正作業の後、先ほどご指名をいただきました議事録署名人の署名を持ちまして、議事録として確定をさせていただきます。それでは以上をもちまして令和2年度第1回仙台市自殺対策連絡協議会を閉会いたします。ありがとうございました。

令和3年2月10日

署名委員 小野 彩香 

